

ロシアの 国際婦人デー

ロシアには三月八日という、男性が女性をいたわり愛情を示す特別の日があるのをご存知だろうか。女性にとって年に一度のお楽しみであるこの日も、かつては女性を中心に、民衆自らが生活の改善を求めて立ちあがった記念すべき一日であったのだ。記念日も時代とともにその様相を変える。日本ではあまりなじみのない「女性を慈しむ一日」を紹介する。

女性に奉仕をする日

二〇〇九年の初春に極東ロシアの先住民の村を調査していたわたしは、危うくピザの有効期限内に帰国できなくなる場所だった。村から空港のあるハバロフスクまで帰る前日になって、いつもは喜んで車を出してくれる村人たちの誰もが「出せない」といい出したのである。その理由を聞いてはたと思いが当たった。その日は三月八日だったのだ。それはロシアでも有名な国民の祝日である「国際婦人デー」で、村の男たちはそれぞれの妻たちに奉仕しなければならない日だったのである。幸い、夫婦でドライブしたいという人がいたために、そこ

に便乗させてもらうことができたが、もう二度と三月八日に移動するような日程は組むまいと思った。日本では三月三日のひな祭りを知らない人はいないが、三月八日の「国際婦人デー」を意識している人は多くはないだろう。しかし、海外ではこの日は結構重要な祝日なのである。

様相を変える国民の祝日

国際婦人デーの由来は、一九一〇年にコペンハーゲンで開かれた第二回国際社会主義者婦人会議での決議にあるとされている。初めて三月八日に実施されたのは一九一三年で、この年以後、毎年この日にヨーロッパの

主要国で女性たちの集会が開かれるようになった。ロシアもそのような国のひとつだったが、この日は特に重要な意味をもっていた。というのは、一九一七年三月八日(ロシア正教が使うユリウス暦では二月三日)の国際婦人デーに起きたデモがふくれあがり、軍隊の反乱を誘発して、皇帝退位にまで発展したからである。それが「二月革命」である。もともと社会主義運動から生まれた集会とデモの日であることと、二月革命の契機となったことが相俟って、ソ連時代、三月八日は革命記念日(二月七日)やメーデー(五月一日)と並ぶ重要な祝日のひとつだった。

社会主義体制を放棄した現在の口

シアでは、この祝日の政治運動的な意味合いはほとんど失われている。それはすでにソ連時代から希薄になっていて、それに替わり、男性が女性を大切にするとする日という性格が強くなっていた。例えば、妻や恋人に花束を贈る、普段女性がしている家事をその日だけは男性が肩代わりするといったことが行なわれた。女性たちの側から見れば夫や恋人、あるいは家族の男性成員たちの愛情を確認するという意識が強くなり、いわばバレンタインデーのような様相を呈していた。

わたしもソ連時代のロシアに滞在中に何度かこの日を経験している。残念ながらというべきか、幸運にもというべきか、わたしにはロシアに愛情を示



息子と孫から花束を受けとる女性 (撮影 フィルソフ・ミハイル)

すべき異性の知り合いはいなかったのだ。家事を肩代わりしたり、花束を贈ったりするという経験はないが、知り合いの女性たちがこの日を楽しみにしていたのはよくわかった。夫たちが料理や後片付け、あるいは掃除、洗濯など普段しなれていない仕事を一生懸命やっているのをにやにや横目で見ながら、同性の友人たちと思う存分おしゃべりをして過ごすのである。彼女たちにとってこの日は、一年に一度ほぼ完全に家事から解放されること保証されている日なのである。

家事や育児は女性の仕事？

ところで、この日を過ごすたびに、わたしは社会主義国家ソ連における男女同権とは何だったのかということをもいつも考えさせられた。

ソ連、ロシアでは労働の種類における男女差が小さい。重機類や大型トラック、電車、バスの運転といった危険を伴う職種でも、半数を占めるのではないかと思われるほど女性の進出が著しい。研究職や事務職は大半が女性である。しかし、その一方で、家事や育児の負担が彼女たちの肩に重くのしかかっていた。まったく家事や育児をしない男たちがいることは事実である。しかし、多くはできないわけではなく、手際が悪いために、女性たちがそれに我慢できずにやってしまうのである。

また、離婚や死別などで片親しかいない家庭では、子どもは母親や祖母が育てることが多い。女性が仕事に家事に育児にと八面六臂の活躍をしながらも、日本ほど出生率が下がらなかったのは、保育園のような働く親のための育児支援施設が整っていたからである。

三月八日はそのようなロシア女性に対する男性たちのせめてもの思いやりというところなのである。しかし、一年に一日というところにやはり男性優位の姿勢が垣間見えてしまう。ロシアはまだまだ男社会なのである。彼らがアルコールに走るのも、女性の社会進出によってそれが崩されていくことへの不満と不安が影響しているという話もあるほどだ。

翻って日本の場合はどうだろうか。家庭のなかはいざ知らず、社会に出れば男性の優位性は盤石である。研究所や大学でさえ、教員には男性が圧倒的に多い。女性の進出が著しい職場や研究分野もあるが、彼女たちには家事と育児が立ちほだかり、三月八日の楽しみすらない。日本はロシアと比べてもまだまだ女性の能力を十分に活かしているとはいえない。ただ、三月八日を特別な日にすればいいというものでもない。男たちが常に家事や育児の半分を負担できるような制度や雰囲気を作っていく方が、社会の活性化への近道だということは皆わかっているのだが……。

【参考文献】 川口和子、小山伊基子、伊藤セツ 1980 『国際婦人デーの歴史』 校倉書房